

門使番井上七左衛門、武田金三郎等が各騎馬で、三ヶ寺の外廻りを一時毎に見廻つた。明くれば朝五ツ時。即ち今の午前八時には永原、赤井、不破、大島、井上は言ふも更らなり監軍、附屬石黒堅三郎、歸山仙之介、其他諸頭奉行等が、何れも本勝寺に出頭した。幕府では吟味役水野良輔等が、野袴陣笠で出役し、本勝寺に在つた正生始め十人を呼出し一人毎に姓名札を持せ、兵士差添ひ同寺の門前で其の姓名札を幕府の出役立會人に渡し、出役人が之れを檢印し、其れから駕籠に乗せ、或は歩行にて、門前から福井、彦根、小濱三藩の人数が之れを引受け、拔身槍を携へ前後左右を取巻いて途中を護衛した。さうして同日夕七ツ時すぎ、本勝寺の分三百八十餘人、異狀なく引渡しを済んだ。

其れから長遠寺へ出向、前記同様の手續を了はり、同夜四ツ時(十時)頃、山形半六等九十餘人、異狀なく引渡しを終り、更らに本妙寺へ出向いたら時は、曉天に及んだ。すると浪士筑井三郎の別當本多與五郎が見常らぬのであつた。其れで金澤藩では幕府の出役水野良輔に掛合、同人を搜索して貰つたら三十日夕景に至り見付かつた。本妙寺に在つたのは、武田惣介等三百四十餘人、是亦異狀なく引渡しを了つた。

加州藩では始め武田勢の降伏を容るゝや、事落着の上は同勢を能登、國鹿島郡、鯨目

村なる士民配流所に移して、北邊有事の日に奉公の擧をなさしめやうと考へて居つたのである。しかも一橋卿が武田勢を、加州藩に一任することが出来ず、幕府に引渡す餘儀なき政狀であつたことは、加州藩としても多くの遺憾を感じたであらう。

— 武田勢を練粕藏の暗室へ監禁 —

— 田沼玄蕃頭は餘程に殘忍酷薄な人 —

各章の冒頭には左のような「小見出し」が付いており、内容は一目瞭然です。

……奥氣紛々たる練粕藏……土藏の窓は皆釘付にして真暗にした……
 敷物も何もない……兩便所は四斗樽の鏡を抜いて細い板二枚……出入り口の戸には手を入れるだけの穴を明け……三度の食事を二度に制限して糧飯一つ……其の穴から差し入れるのである……金澤藩の永原、赤井、不破、武田等は、一橋卿からも……二條關白……所司代からも物を賜はられて褒賞された……金澤藩の行届いた措置……

勢は世で仕方がないが、其れにしても金澤藩から幕府に引渡すと、其の待遇や雲泥の相違、練粕を入れる肥料と引換へに、土藏の中に投せられた。さうした土藏は現在一種残つて居て、浪人士藏といふとかであるが昔を今に徳川幕府でふ存在を呪はずには置かれぬのであるまいか。

其れは皆で置き、練粕を入れる土藏は船町に在つた。今は蓬萊町といふて、其處の十六戸を俄かに借上げたのである。そして土藏の中に入れてあつた肥料は取出して往來に積上げたのである。土藏の窓は皆釘を打付けてしまつたから、真暗であつた。敷物に差さへ當てがはない、兩便所は四斗樽の鏡を抜いて、其の上に細い板二枚を並べたものを、土藏の真中に据ゑたのであつた。出入口の戸には手を入れるだけの穴を明けて、其處から三度の食事を二度に制限して、糧飯一つにぬる、湯を差入れるのであつた。

内容見本

(70%縮小)

始め浪士を護衛して土藏の前に来ると、其處に幕府の役人が居て、衣類は言ふに及ばず、帯や下帯までも一々改め、そして懷中物皆沒收のみか、浪士共多くは襟に縫ひ込んであつた金子を、一々破つて之れを四斗樽に落した何でも銘々の金子が合計一千餘兩にも及んだ。武田正生は慶長判十枚所持して居つた。其れから正生外三十人計りを除いて、其他は一樣に左の足に足枷をしたのである。さうした足枷は松の一寸五分計りの厚板で作つたものであつて、幅三寸長一尺二寸、中央に足を挿むだけの穴があつて、締めるに大釘で打付けたのである。

土藏一戸は五間に七八間の大きさであつて、一戸に五十人宛を收容した。西の方から數へて一番藏から四番藏までは小濱藩の人数が預り、五番藏から十番藏までは福井藩人数が預り、十一番藏から十六番藏までが、彦根藩人数が預り、そして土藏の前後を警衛した武田耕雲齋と日本之武士道の著者、齋藤平治郎は其の著に、如何に幕府の威を藉つて筑波郡珂湊敗戦の稱讃を霽すの處置としても、田沼侯は餘程に殘忍酷薄の性を帯びた人の様である。と書いてある。誠に其の通りである。

永原、赤井、不破、武田等は、後ち二月九日になつてから、京師に在る一橋卿から召され、慰勞として金品を賞賜された。其れから同時に二條關白、所司代からも永原、不破に物品を贈つて之れを褒賞された。又金澤藩では永原に三百石、不破、赤井に百五十石の祿を増された。金澤藩では更らに敦賀表に於て便宜を興へてくれた小濱藩の坂田書



尊皇攘夷運動の

東の総本山水戸藩

三十五万石に

起きた

「天狗党の乱」を

活写し、

維新の本質に迫る。

武田耕雲齋 詳傳

一名水戸藩幕末史

大内地山 [著]

上下 全二卷



マツノ書店



武田耕雲齋自画像

上巻目次

- 武田氏の祖先と由来
 - 常州那珂郡武田郷が是れ
- 武田耕雲齋五代の祖
 - 跡部彦九郎正矩
- 藤田東湖の武田氏家譜の序
 - 本藩の器械修武備精練は正生の力
- 武田氏の家譜
 - 正矩の父が将た又祖父か
- 烈女伊賀守夫人とき子
- 武田耕雲齋の後継者
- 武田耕雲齋の生立から
 - 文政十一年の二十五歳まで
- 哀公の継嗣問題を繞つて
 - 武田彦九郎使番となつた時
- 烈公襲封人物塩梅方法
 - 彦九郎京師に使し皇女降誕を買す
- 立原藤田両學派の黨論起ころ
 - 彦九郎等曾澤復職運動
- 内外漸く多事の水戸藩政
 - 彦九郎用人に補せらる
- 武田勢の行動は目標が日本國家
 - 彦九郎参政となつて水戸に移る
- 烈公就藩して人材抜擢
 - 彦九郎参政に登用さる
- 烈公磯崎の競馬へ出御
 - 武田彦九郎小石川藩邸に移る
- 結城黨専恣跋扈の始め
 - 武田彦九郎大番頭となつて水戸へ移る
- 武田家家紋松皮菱と館記楊本
 - 藤田東湖が代筆した箱書
- 結城寅壽の毒手愈々動く
 - 武田彦九郎妙雲寺跡へ屋敷賜はる
- 烈公が譴誣された弘化元年
 - 烈公湊御殿に八日間滞在
- 烈公冤罪で愼隠居
 - 武田彦九郎雪冤に乘出す
- 武田等の雪冤運動奏功
 - 彦九郎致死して耕雲齋と號す
- 歎訴する心武田の甲斐ありて
 - 八景に因んだ落首及び天狗六歌撰
- 姦黨の暴政愈々甚だし
 - 役方並びに君側總て姦黨
- 武田耕雲齋の家訓と五たび死を決す
- 陰雲散じ盡きて月輪高しの慨
 - 武田耕雲齋等何れも救免さる
- 嘉永五年中に原状回復
 - 武田彦九郎若年寄となつた
- 烈公旭日丸新造に着手
 - 那珂湊に砲台を築く
- 戸田藤田は地震で壓死
 - 武田彦九郎再び大番頭となる
- 烈公遣米使節たらんと請ふ
 - 武田正生英語を學習せしめよと上書
- 烈公の謂ゆる御廟算何書
 - 武田伊賀守書幕府に阿諛する勿れと
- 烈公順公等仮条約締結を面詰す
 - 武田修理幕府へ呈書す
- 違勅の条約締結に宸襟を惱ませらる
 - 武田修理幕府の朝旨書屏を憤慨す
- 鮎澤伊太利夫討幕の繪旨を請はんとした
 - 鶴飼吉左衛門書を安島常刀に贈る
- 茅屋根寒縁絶筆の詠詩
 - 西郷隆盛の眼中に映じた偉人武田修理
- 鎮論家藩論統一を妨碍
 - 幕末水戸藩の正論家代表武田耕雲齋
- 勅諭奉還と不幸還の藩論
 - 要路の軟派奉還論に転向
- 武田伊賀の勅諭不可奉還論
 - 志士に対して飛道具を用いるとは
- 勅諭不奉還を中心として
 - 齊藤利昭の死諫其功を奏した
- 赤き心に染めなす桜田門外の雪
 - 斬姦書を脇坂老中へ指出す
- 武田耕雲齋等藩政に参与
 - 烈公水戸城にて薨去後の水戸藩
- 武田耕雲齋の威望
 - 大津彦五郎等抜擢の先鋒たらんとす
- 水戸の志士東禪寺英館襲撃
 - 武田耕雲齋等御用問を免ぜらる
- 水戸藩の志士斬姦状を掲げて
 - 老中安藤對島守坂下門に要撃さる
- 鎮派の内証明らかさまに表面化する
 - 上方筋は機夷論大に聲威を張る
- 鎮僻派の本性を暴露した
 - 武田耕雲齋等を譴誣計畫
- 会澤伯民の開国論
 - 武田耕雲齋執政再勤
- 幕府攘夷の勅書を諸侯に示す
 - 武田耕雲齋執政再勤
- 順公が上京日記の大略
 - 武田正生の補翼順公の面目揚ぐ
- 武田正生鶴岡假建に参着
 - 国事に関する急務あるときは
- 朝廷特に詔して耕雲齋を召す
 - 武田耕雲齋に下向の御達
- 一橋慶喜頻りに武田正生を手寄る
 - 武田から上京御見合然るべしとの返事
- 八月十八日事変後形勢俄然激変
 - 順公及び慶喜の盡力で鎮藩談判定まつた
- 幕府武田正生に關東鎮撫を委囑
 - 武田正生に三條實美から書翰
- 武田耕雲齋激徒を鎮撫す
 - 謂ゆ抜本塞源の高等政策
- 武田耕雲齋諸大夫伊賀守となる
 - 従五位下に推任叙せられたのも此時
- 武田耕雲齋が藤田小四郎を誡む
 - 田丸稻之衛門等專横の義旗を樹つ

- 田丸稻之衛門太平山に據る
 - 武田耕雲齋も江戸に上る
- 波山勢の軍用金調達
 - 武田耕雲齋から二萬兩
- 田丸直允筑波山に據る
 - 武田伊賀守が小四郎を誡めた所以
- 姦黨追討を名に天狗を譴誣
 - 家老武田伊賀守等愼隠居
- いよいよ波山勢追討に決定
 - 波山勢連絡とれず大敗
- 追討軍は波山勢に滅茶々々にさる
 - 飯田軍威の殊勳総陣より感状
- 下妻の家老監軍を追掛け談判
 - 追討軍敗れて江戸に引揚げた
- 波山勢から除名された田中勢
 - 参謀土田衛平は藤本鐵石の門人
- 有志黨が姦黨排斥の議
 - 武田伊賀守憤然として起つ
- 市川佐藤朝比奈等水戸城を乗取る
 - 貞芳院夫人嬪命を稱論す
- 波山勢から分離された志士
 - 水戸史談著者の批判は見当違ひ
- 市川等政権を握つて愈々横暴
 - 水戸領内所々に暴徒起る
- 塙又三郎の興國策三難
 - 波山勢分離組各地に敗北
- 松平大炊頭目代として下向
 - 武田伊賀守請ふて之れに尾した
- 松平大炊頭磯濱に據る
 - 市川勢潰脱切磯濱に防戦
- 藤田小四郎等応援として磯濱に来る
 - 市川勢潰落落ち水戸城指して遁逃す
- 市川等水戸城内外の警備を厳にす
 - 貞芳院夫人市川の暴卒を苦慮す
- 大炊頭城下神勢館に移る
 - 武田伊賀守達の留守部隊となる
- 武田伊賀守より來り援く
 - 福地政次郎瀕り波山勢の応援を拒む
- 大炊頭神勢館を引揚げ湊に還る
 - 必勝號打を福地政次郎が反対
- 市川の参謀友部田沼意尊を説伏す
 - 鐘兜を来た将官が城下を練り歩く
- 波山勢平磯に引揚げ瀨來勢は湊に
 - 武田伊賀守偵知して敵の機先を制す
- 武田伊賀守水戸藩情勢を朝廷へ
 - 磯濱援兵の総司に武田彦衛門
- 大勢勢から継子扱された武田勢
 - 兵糧徴集に苦勞した瀨來館勢
- 林五郎三郎銃丸に中つて斃る
 - 壬生藩勢平磯村の波山勢を襲ふ

下巻目次

- 武田伊賀守大炊頭を諷む
 - 大炊頭夏海行を斷行一同に訣別す
- 松平大炊頭に割腹仰付らる
 - 近侍役等七人車座になつて割腹
- 九月二十五日部田野原合戦
 - 此日市川勢等平磯村に火を放つ
- 十月朔日から二日まで唯砲聲のみ
 - 幕府の軍艦奉行軍艦を率ゐ来て発砲す
- 大勢勢峯山を棄て反射炉に引揚ぐ
 - 武田勢の砲威により敵兵を斥く
- 十月十日部田野原の合戦
 - 十一日捕虜間瀬菜吉等を送還す
- 北方落の協議遂に整はず
 - 神原福地等が極力反対するので
- 十六日朝早く諸藩勢市川勢繰出す
 - 市川勢等例に依て例の如く敗れて退却
- 十七日諸藩兵及び市川勢六千人
 - 前濱部田野の道から兵を進めて砲撃
- 十八日田沼総督出馬惣勢一萬五千人
 - 戦線は部田野の西田上から前濱まで
- 榊原等幕軍へ降伏の條件
 - 同志武田伊賀守の首を斬つて提供
- 水戸藩幕末の大立物武田耕雲齋
 - 何を語るか私しや起つ鳥波に開けの磯節
- 武田勢が武州本庄驛に着するまで
 - 十月二十九日に大子村を出発してから
- 武田勢行軍日記
 - 十四日本庄宿を出て十五日下仁田驛へ
- 道を南上州に執つたのは金井之恭の指圖
 - 小幡七日市南藩勢出でず高崎藩大敗北
- 武田勢下仁田に於て大捷利
 - 本宿から和宿宿までの行程
- 武田勢和田峠樋橋に戦争
 - 武田勢和田峠で三度まで追返さる
- 松本諏訪二藩勢大敗北
 - 下諏訪から新保驛まで
- 武田勢追討を八十一番に命ず
 - 武田勢関ヶ原方面へ出でず越前へ
- 朝言は追討ではない鎮撫すれば其れで好い
 - 一橋卿より朝廷へ願出の御許容
- 一橋卿は加州藩に加勢を依頼
 - 十二月七日永原甚七郎を鎮撫に進発せしむ
- 加州藩勢が武田勢夜襲を中止
 - 澁澤誠一郎の言に動かされた加州藩
- 武田勢新保驛に於て進退を決す
 - 伊賀守曰く命か連か主君に等しき二公に敵し得ずして
- 武田勢愈々降伏と決定
 - 一橋卿の大政奉還は此に胚胎したのである
- 武田伊賀守敦賀に收容さる
 - 公卿及び諸侯に武田勢を寛典に處する運動
- 田沼玄蕃頭が一橋卿を欺く
 - 金澤藩の云爲は儼然犯すべからずであつた
- 永原甚七郎等と幕吏との問答
 - 武田勢一同に対する取扱方に就いて
- 金澤藩から三藩に御預替
 - 金澤藩は武田勢を能國へ屏御する筈で
- 武田勢を練柏蔵の暗室へ監禁
 - 田沼玄蕃頭は余程に残忍酷薄な人
- 武田伊賀守以下吟味後死刑
 - 永嚴寺住職龍道和尚の偈並びに法名
- 姦黨跋扈の水戸藩政府
 - 余りに無識の友部八太郎
- 武田伊賀守一家族の処刑
 - 無情冷血も涙もない奸黨の措置
- 姦黨俄然一大恐慌を來した
 - 將軍職を辭し一橋卿に譲りたき御願
- 姦黨水戸藩政を絶えず妨害
 - 一橋卿に征夷大將軍となつてから
- 大政奉還直後の水戸藩政
 - 水戸家へ除奸の勅書下る
- 姦黨等水戸を脱して会津に落行
 - 因はれて居た人々何れも救免となつた
- 順公脚氣病で水戸城に薨去
 - 水戸に在つた有志の上は佐幕論者である
- 遠島を命ぜられた武田金次郎等救免
 - 帰國の朝命を奉して同勢百三十八
- 水戸藩政革新脱姦処分
 - 前將軍徳川慶喜が道館出立
- 武田耕雲齋其他志士の遺稿
 - 松原神社社祭神列傳
- 西上途次戦史及び敦賀に於て病死者
 - 松原祭神洩れの者もある
- 敦賀に於て病死したる志士
 - 松原祭神洩れの者もある

限三三三部(番号入)
 書店不卸 分割払可 返本OK
 山口県岩国市西二の三
 山口県岩国市西二の三
 マツノ書店



『武田耕雲齋詳傳』の復刊に寄せて

作家 中村彰彦

武田耕雲齋といえ、幕末史を語る史書のうちにしばしば登場する名前である。しかし、近頃の高校レベルの日本史ではまず扱われなくなっている。初めにそのプロフィールを頭に入れておこう。

「たぐひなきもの」[武田耕雲齋] 1804~65.2.4

幕末期の水戸藩の執政（家老・筆者注）。水戸藩士跡部正統まさつぐの長男。のち本姓武田に復す。名は正生まさなり、通称彦九郎・修理。致仕後耕雲齋と号した。藩主に徳川斉昭なりあきを擁立以来、改革派の重臣として活動。斉昭の謹慎、復職に応じて致仕・昇進したが、一八五六年（安政三）執政となる。六二年（文久二）に一橋慶喜よしのぶの上洛に随従。六四年（元治元）一月伊賀守。藤田小四郎ら天狗党の筑波山拳兵により五月に執政を罷免された。市川三左衛門ら門閥派政権に対抗して一〇月に筑波勢と合流、天狗党を再編してその首領となり、京都に向けて西上の途についた。途中諸藩兵や大雪・寒気と戦う難行に力つき、金沢藩に降伏し、六五年（慶応元）二月四日、敦賀つるがで斬刑に処せられた」（『日本史広辞典』、ルビ筆者）

本書は、略歴を要約すれば右のようになる人物の事跡を上巻七百四十二ページ、下巻五百九ページにわたって詳述し、加えてその同志たちの略歴百十一ページ分を添えた伝記である。ただしその風貌やからだつき、性格については、著者大内地山は、

「軀幹長大であつて身の長け六尺に近かつた。そして姿勢端正で威あつて猛からざる偉人であつた。（略）容貌に痣痕しこん（ほくろ）点々たるものがある。其の人と為りや剛毅不屈で。義公（水戸藩第二代藩主徳川光圀）以来伝統の水戸学精神が信条であつて之れを実行に移すことに。最も勇敢であつた」

という程度しか筆を費やさない。「一名水戸藩幕末史」という副題からも知れるように、著者は単に武田耕雲齋の人生のみならず、尊王攘夷運動の東の総本山であつた水戸藩三十五万石のたどつた運命をも叙述しようとしているためである。

さて、水戸人の一大特徴は党争を好んだ点にある。

文政十二年（一八二九）に第八代藩主徳川斉修なりお（哀公）が死亡する前後には、將軍家斉の子を養子に迎えるようとする保守門閥派と斉修の弟斉昭（烈公、第九代藩主）を推す軽格改革派が対立。それが遠因となつて幕府から弘化六年（一八四四）五月に致仕謹慎を命じられた斉昭は、嘉永六年（一八五三）、ペリー来航にあつて老中首座阿部正弘より幕府海防参与を命じられたが、あまりにガチガチの攘夷論者であつたために開国派の大老井伊直弼によつて政治的生命を奪われてしまった。

安政五年（一八五八）六月十九日、井伊政権が勅許なきまま日米修好通商条約に調印したのは周知の事実だが、これを不満とした孝明天皇が水戸藩にいわゆる「戊午の密勅」を下し、幕府の非を鳴らしたことも党争の火に油を注いだ。水戸藩士たちは密勅返還論者と返還反対派にわかれ、対立を激化させたのである。同年三月三日（三月十八日）万延改元。登場途中の井伊直弼を桜田門外に襲殺した水戸脱藩者たちは返還反対論者の一部だといえ、水戸藩の党争が日本全体を揺るがす地雷原のような存在へと変質していった過程が理解できようか。

このような渦巻のなかにあつて、耕雲齋は一貫して改革派、返還反対論者、攘夷派（再鎮国派）でありつづけた。この党派は「天狗党」と呼ばれ、かれは天狗党の領袖格のひとりへと育つていったのである。

その耕雲齋にとつてもっとも得意の時期は、皇女和宮親子内親王が十四代將軍家茂に降嫁し、世が公武合体に動き出した文久二年（一八六二）から翌年前半にかけてのことだったのであるまいか。攘夷論者である孝明天皇の幕府に対する発言力が強まるにつれ、家茂もこれまでの開国策から再鎮港に傾斜。水戸藩にあつては耕雲齋をはじめ大場一真齋、岡田徳至のりよしらが家老職を占めて天狗党政権が樹立されたからである。亡き烈公の七男に生まれ、徳川御三卿のひとつ一橋家を相続していた慶喜が將軍後見職として上京した時、耕雲齋はともに上京し、天皇から陪食を仰せつけられる光栄に浴した。

しかし、薩摩藩と会津藩が手をむすんで決行したクーデター「文久三年八月十八日の政変」の結果、すでに馬関攘夷戦をおこなつていた長州藩や尊攘激派公卿は出鼻をくじかれた。これまで三条実美さねよしら尊攘激派公卿は攘夷親征を断行することこそ天皇の願いであると称してきたが、これはまったくの偽りだつたとが判明し、全国の攘夷派は退潮を余儀なくされてしまったのである。

文久三年十月十二日に起こった生野の変は、これに反発した尊攘派の叫びであった。おなじ不満は水戸天狗党の内部にも募り、かねてから長州藩の桂小五郎と東西呼応しての武装蜂起を画策していた藤田小四郎は、同志の町奉行田丸稻之衛門らと図って筑波山拳兵に踏みきった。いわゆる「波山勢」がそれであるが、本書には、はじめ「小四郎に対し波山義拳の早計であることを誡めた」耕雲齋が「二万両」の軍資金を与えた、という注目すべき記述もある。この点を押さえさえすれば、まもなく耕雲齋が波山勢の総帥となり、攘夷の素志を朝廷に嘆願しようとして中仙道經由越前まで戦いつつ前進した背景も理解できるのである。

特に本書上巻の後半から下巻にかけては、これら一連の「天狗党の乱」が水戸藩領から下野、上野、信濃、越前へと移ってゆく姿を諸史料によってよく描き出していることに感心させられる。特に元治元年（二八六四）十二月、加賀藩に投降したのは合計八百二十三人であったこと、幕府に手柄を引きわたされたかれらが敦賀の鯨粕を入れる土蔵十六棟に押しこめられて便所は四斗樽、食事は一日二回のみ、左足には足枷あしかせをつけられるという非道な待遇を受けたのち耕雲齋をふくむ三百五十二人が斬罪に処され、二百五十人が遠島になったことを詳述するくだけは本書の白眉といつてよい。

わが国最大・最良の歴史辞典である『国史大辞典』の第九巻、武田耕雲齋の項および天狗党の乱の項が参考文献として本書を挙げているのは、むしろ当然のことであろう。

ちなみに、著者大内地山（明治十三年（一八八〇）〜昭和二十三年（一九四八）は、茨城県那珂湊市（現ひたちなか市）出身の歴史学者。本書は昭和十一年九月十七日、水戸市の協文社内（現協文社）に置かれた水戸学精神作興会から発行され、昭和五十四年に常陸書房から復刻されたことがある。すでにマツノ書店から復刻された『修訂防長回天史』全十三巻と本書とを併せ読めば、西の長州、東の水戸に起こった尊王攘夷運動がどのように進展したかを包括的に知ることができよう。

なお本書には「絶対観の尊皇」という著者独自の用語が頻出し、水戸学を批判的に眺める態度に欠ける点はいささか問題なしとしない。反天狗党グループを「姦党」「奸人」と決めつけてかかる筆法には、首を傾げる人もあるかも知れない。これらの点は割り引いても、十分に読むに堪える内容になっていることを最後に付け加えておこう。

「菊池寛賞」と復刻出版

『防長回天史』から『武田耕雲齋詳伝』まで

萩市特別学芸員 一坂 太郎

現在もお維新史研究の基本文献として求められ、利用されているもの多くは、明治の終わりから昭和の初めまでの三十年ほどの間に、集中して出版されている。

二百冊近くからなる日本史籍協会叢書をはじめ、『大日本維新史料』『復古記』『維新史料綱要』などは、維新史全体を見渡した史料集だ。一方『水戸藩史料』『維新土佐勤王史』『修訂防長回天史』、そしてこの度復刻される『武田耕雲齋詳伝』一名水戸藩幕末史』などは、ひとつの藩や組織の功績を後世に伝える目的で編纂された。他にも伝記や個人の遺稿集など枚挙に暇がない。その充実ぶりには驚かされる。

もっと早くから、国家的事業としての維新史料収集、編纂の必要は唱えられていた。しかし、なかなか着手出来なかった。なぜなら維新とは薩摩・長州の軋轢史で、また、討幕対佐幕で国内を二分した内戦史でもあったからだ。歴史とするにはあまりにも生々し過ぎた。感情的な問題が起こり、政局にまで影響しかねない危険を孕んでいたのである。

明治四十四年五月になってようやく維新史料編纂会が文部省内に設置されたりして、空前の維新史文献ラッシュが訪れた。堰を切ったように、貴重な史料が次々と書籍になって世に普及してゆく。以来今日に至るまで、維新史を研究する者は何らかの形で、この時期に出版された基本文献群のお世話になっている。この形である。

ただ、出版さえしておけば史料は永遠に残ると思われがちだが、それは違う。現にこのラッシュ時の基本文献はすでに七十年から百年の歳月を経ているから、用紙は劣化し、革表紙は痛み、製本は崩れかけているものが少なくない。あるいは、この間に戦災や天災で失われた本も多いだろう。

だから物理的に見ても、誰かがこれらの基本文献をメンテナンスしなければ、次の時代へと橋渡しが出来ない。メンテナンスとは、復刻だ。マツノ書店という一地方の本屋が、維新史の基本文献の復刻で、全国的にその存在を知られるようになった。それは、単なる偶然ではない。ラッシュ時に出版された基本文献がメンテナンスを必要とした時期と、マツノ書店の活動期が合致したから出来たのである。もちろんそこに、店主の高い志があったの言うまでもない。

しかし、これは終わりが無い仕事だ。百年後、マツノ書店復刻版の基本文献が朽ちた時、誰かが再び復刻の仕事を引き受け、先人から伝えられた文化のバトンを次へと渡さねばならない。先日、マツノ書店の永年にわたる仕事認められ、第五十五回菊池寛賞が贈られた。復刻出版が、こうした形で評価されるのも、珍しいのではないか。それは百年の後、復刻という事業を志す「誰か」を激励するものであって欲しいと切に願う。

さて、冒頭で触れた『武田耕雲齋詳伝』だが、昭和十一年に水戸学精神作興会から出版されている。すでに七十余年前の本だ。古書店でも、めったにお目にかかることは無い。しかしあのラッシュ時に出版された基本文献で、内容は折り紙付である。このたびの復刻により、あと百年は間違いなく読み継がれてゆくだろう。そう思うと、なんだか嬉しい気分になる。